

『風の谷のナウシカ』の神話学

大野 斉子

はじめに 『風の谷のナウシカ』—作品概要

論文の概要

拙論は宮崎駿の漫画作品『風の谷のナウシカ』を神話論的な枠組みから読むことによって、現代の神話としてこの作品が何を語っていたのかを考察することを目的としている。まずは、『風の谷のナウシカ』の内容を紹介したうえで、これがいかに神話的要素を持つか、その論理構造の特徴は何かについて、古代キリスト教の異端であるグノーシス主義を手掛かりに考察する。これを通じて最終的には現代の神話としてこの作品がいかに機能し、新たな世界観を開いたかについて論じていきたい。

漫画『風の谷のナウシカ』

『風の谷のナウシカ』は月刊雑誌『アニメージュ』の1982年2月号から連載を開始した宮崎駿の漫画作品である。1984年にはこの漫画作品をもとにして同名のアニメ映画が公開された。翌1985年に宮崎駿は映画製作所スタジオジブリを高畑勲とともに立ち上げ、数多くの作品を世に送り出し、日本のアニメーション映画の一時代を築いていく。

漫画の連載中に公開されたこともあり、映画『風の谷のナウシカ』は漫画の冒頭から第2巻の途中までのストーリーを収めている。漫画と映画の関係については原作—二次創作とみることもできるし、両者を独立した作品と解釈することも可能だろう。しかし両者の比較対象を行うことは拙論では行わない。拙論の目的は『風の谷のナウシカ』を一つの神話として捉え、神話論の枠組みから作品で展開される世界観や思想を読み解くことにある。したがって思想や世界観が十全に表現され、物語として完結している漫画作品の方のみを題材として取り扱うことにする。

『風の谷のナウシカ』のあらすじ

漫画『風の谷のナウシカ』（以下、『ナウシカ』と表記）は以下のような物語である。

舞台は巨大文明が滅亡してから1000年後の地球である。陸地の多くは毒の瘴気を出す森である腐海に覆われ、人類はわずかに残った居住可能な土地に点在していた。ナウシカはこうした土地の一つである小国「風の谷」の族長の娘である。

軍事技術にたけた大国トルメキアと、神聖皇弟や僧会が権力を握る宗教国家、土鬼（ドルク）の間で領土拡張をめぐる戦争が勃発し、ナウシカは盟約によってトルメキアのクシャナ王女の軍隊に従軍する。ナウシカは途中、戦線を離脱してマニ族や王蟲（オーム）と接触する。マニ族の僧正はナウシカを古い伝説にある「失われた大地との絆を結ぶ青き衣の使徒」の再来と考え、大海嘯と呼ばれる破滅的事態が近いことを予言する。

土鬼は謎の技術によって王蟲や粘菌などの生き物を人工的に改造・培養し、戦争の切り札として利用するため地上に投下した。爆発的に増えた粘菌は強毒の瘴気をまき散らし、王蟲の大群と一体となって大海嘯を引き起こす。これによって広大な国土が腐海に覆われたが、王蟲に共感を抱くナウシカは、粘菌と腐海の苗床となった王蟲とともに腐海の一部となる道を選び、死を選ぶ。

大海嘯によって戦争を継続できなくなった土鬼は、皇弟に代わって皇兄が実権を握り、トルメキアとの平和を目指す。同時に強大な戦力となる巨神兵やヒドラを古い技術を駆使して復活させ、世界征服をたくらむ。一方、ナウシカは腐海が消滅する果てに生まれる清浄世界の存在を知り、死の淵から帰還する。

これまで追究してきた腐海の謎を解き明かすことを決意し、ナウシカは巨神兵を伴って巨大文明の時代に作られたシュワの墓所を目指す。途中、秘密の楽園に案内されるが、安逸な暮らしの誘惑

を退けたナウシカは楽園の守り人から昔の人間が世界に仕組んだ秘密があることを知らされる。それは腐海が汚染された地球を正常化するために人為的に作られた生態系であり、人間も腐海の毒に耐えられるよう改良されていたというものだった。ナウシカは時を同じくしてシュワの墓所へ到達したトルメキア王とともにシュワの墓所の主と出会う。それは生命を改造した旧世界の科学者たちだった。ナウシカは生命は闇と表裏にあることを主張し、シュワの主の考えを拒絶する。シュワは倒壊し、ナウシカたちは生きる道を模索する。

以上が漫画『ナウシカ』全7巻のあらすじである。

第一章 ナウシカにおける神話構造

ナウシカの神話性 二つのプロット

『ナウシカ』は発表と同時に、重層的なテーマと物語性を持つ作品として世代を超えて大きな反響を呼び、現在でも論じられることの多い作品である。ここには現代の生きた神話としてのほたらきを見出すことができる。拙論では『ナウシカ』を神話論の枠組みから考察する方法を取るが、その根拠として『ナウシカ』がいかなる神話的要素を持つのかについて、論じておきたい。

まずは主人公ナウシカの人物造形における神話的要素を取り上げたい。宮崎駿は『風の谷のナウシカ』第一巻のあとがきで、主人公ナウシカの原型となったのは、ギリシアの叙事詩『オデュッセイア』に登場するナウシカアという娘と、日本の古典『堤中納言物語』に収められている『蟲愛づる姫君』の主人公の二人であると述べている。ナウシカアについては、『オデュッセイア』を小説化した、いわば原作に近いイメージよりも、解説書である『ギリシア神話小事典』で著者バーナード・エヴスリンが脚色を加えて生き生きと描き出した、俊足で空想的、自由な生き方を追求して女性の吟遊詩人となったとされるナウシカアのイメージに強く魅了されたとしている¹。『オデュッセイア』第六歌でパイエクス人の国に漂着したオデュッセウスに、偶然居合わせた王女ナウシカアが着物と食物を与えて町へ連れて帰る²。確かに『オデュッセイア』に登場するナウシカアは利発で自由闊達な少女に描かれるが重要人物ではな

く、エヴスリンの方が印象的かつ詳細にナウシカアを描写している³。しかしエヴスリンのナウシカアと『風の谷のナウシカ』の主人公の人物造形には大きな開きがあるのも確かである。ここでは『ナウシカ』がギリシア神話や古典の説話的な世界を一部に宿していることを確認するにとどめたい。

『ナウシカ』の神話性を担保するのは人物よりもむしろ物語構造である。『ナウシカ』は主人公が旅に出立し、数々の試練と出会いを経て世界を破滅から救い、最後に謎の核心へと向かって人類に新たな道を開くという英雄物語の構造を備えている。ほぼ全編を通じて戦争が主人公に旅の動機や試練を与えるだけでなく複数の対立軸の結節点となって物語が展開することから、英雄譚の中でも戦記物の性格が強いといえる。

しかし『ナウシカ』はただの戦記物ではない。戦いの勃発、展開、終息は表向きのプロットに過ぎず、この戦いに絡む複数の対立軸に示される思想の戦いこそが物語を内部から動かすメインテーマとなっているのである。対立軸として挙げられるのは人間の世界と腐海や虫などから成る自然、トルメキアの帝国主義と風の谷のような小国の哲学など様々である。

これらの対立軸が内部構造として物語に埋め込まれ、思想間のダイアローグを展開するのだが、対立軸の多くは最終的に、シュワの墓所が体现する科学的で近代合理主義的な思想とそのアンチテーゼとしてナウシカが提示する生命観の対立に収斂していく。ここでは地上で行われている争いとは別次元の宗教的な位相における戦いがもう一つのプロットとして物語を動かしている。『ナウシカ』の物語の基底にあるのは、生命や神をめぐる宗教的な論争なのである。ナウシカはこの位相において旧来の世界から人類を解放し、新たな方向を示す宗教的な英雄となる。この二つ目のプロットは、森や虫、光と闇などの象徴から織りなされる神話的思考が明白にみられ、戦記物語と二重写しになって『ナウシカ』の物語世界を内部から支えている。

ナウシカにはこの他にも国家権力と結びついた教団組織を持つ土鬼の僧会と、これに面従腹背し、古い信仰を守るマニ族などの土着の民のように、

宗教的な対立軸が登場する。『ナウシカ』は世界の成り立ちやそこに生きる人間が何者かを物語によって解き明かす神話の条件を備えた物語であると言える。

『ナウシカ』の神話的プロットとはどのようなものかについて、宗教的なテーマを辿りながら考えていきたい。

『ナウシカ』には神という言葉がよく登場するが、コンテキストに応じて指し示す存在が異なっている。物語の中で宗教的なテーマが初めて前面に出てくるのは第二巻、マニ族の僧正の登場とともにである。僧正はナウシカがマニ族に伝わる神話の人物「青き衣の人」の再来だと予言し、死後も守護霊のようにしてナウシカを守る⁴。マニ族という名称は徹底した二元論で知られる古代キリスト教の一派であるマニ教を連想させる。マニ教は原初から光と闇が存在する二元的宇宙を構想する。超越神は光の世界の頂点に存在し、それに対立する闇があらゆる悪しきものを含みこんでいる。二つの世界は接しており、人間の生命・社会活動は、この二つが混ざり合うところにあるという教義である⁵。確かにマニ族の僧正は光と闇の二元論を提示し、これは『ナウシカ』の思想的探求を牽引する重要な原理となる。

「青き衣の人」の伝説は『ナウシカ』の重要なモチーフとして要所ごとに繰り返される。これにより『ナウシカ』は現代（ナウシカの時代）に青き衣の人が再来して世界を救う新たな神話としての枠組みを得るのである。『ナウシカ』にはほかの部族集団も登場するが、ナウシカに神話的英雄の役割と二元論を与えた点でマニ族の働きは大きい。

ナウシカは第4巻で、僧正の信奉する宗教の聖地へ偶然赴く。そこは神聖皇帝に滅ぼされた旧来の王族が支配した土鬼の聖地である。そこで出会った高僧からナウシカは、土鬼の祖が世界を破壊する技術を収めたシュワの封印を神聖皇帝が解いたために腐海があふれ、破滅がやってくることを告げられる。シュワとはナウシカが最後に向かい、物語のクライマックスの舞台となる重要な場所である。

この場面で土鬼の歴史と伝説の由来が示されたことで、これまで領土争い以上の動機がはっきり

見えなかった大戦争に歴史と宗教という構造が与えられた。戦記としてのナウシカはこのあと急速に、個々の登場人物の内面が展開され、ドラマ性を高めるとともに、複数の思想同士のダイアログとしての性格を強めていく。

更に、ナウシカが使徒の役割を与えられたことの意味も明確化する。ナウシカはこの中で、古い土鬼王国の宗教世界を背後に背負い、その信徒たちを導く形で神聖皇帝に立ち向かう、ジャンヌ・ダルクのような英雄としてあらわれる。

第二章 神を見返す眼差し—否定される造物主とグノーシス主義

旅の終着地としてのシュワ

では、ナウシカはいかなることを成し遂げた英雄なのだろうか。そこにナウシカの英雄としての、また神話としての特徴があるとしたら、それはどのようなものなのだろうか。これを考える上でまず『ナウシカ』の物語における宗教思想を二つに分けて整理しておきたい。

一つ目はナウシカが掴み取る思想である。ナウシカは物語の初めから、腐海がなぜ存在するのかという問いを抱いている。そして大海嘯に立ち会い、腐海が汚染された大地を解毒し、浄化する生態系であることを解明する。土鬼が人工的に作り出した猛毒の瘴気を出す粘菌が蟲と食い合いをしたのち、蟲を苗床として腐海を生み出していく様を見て、ナウシカは生と死の区別を超えてその二つが混ざり合う位相に生命が存在するという認識に到達する。更に、腐海の果てには元通り浄化された土地が生まれているという希望を得る。ナウシカは若々しい生きた信仰を築き上げるのである。

大海嘯を通じてナウシカの探求は終わったかに見えるが、物語はさらなる謎を提示する。それはシュワの墓所という、土鬼に古くから伝わる一種の聖地である。シュワの墓所は産業文明が滅亡する以前から存在し、かつての技術を今に伝える唯一の場所である。トルメキアと土鬼の戦争は終わったばかりか、土鬼の皇帝たちが二人とも死んで僧会も崩壊したとき、大海嘯を引き起こし土鬼の強大な力の源泉となったシュワの墓所が物語の中で急速に問題化される。シュワの墓所はナウシ

カやその仲間たちの生きる世界とは違う別世界からやってきた大きな謎、外部としてあらわれるのである。

ナウシカの最大にして最後の敵となるシュワが二つ目の宗教の担い手である。シュワの主とは何らかの技術で脈動する石碑に記録された、1000年前の産業文明の代表者たちの意識であり、土鬼の事実上の神に相当する。シュワは土鬼の神聖皇帝に技術と人類救済の教えを与えた国教のような位置づけにある。土鬼の神聖皇帝は、旧来の土鬼王から王位を奪って古い技術を盗み出した僭称者である。神聖皇帝は呪術にたけた皇弟と、呪術を持たず技術力でその身を永らえる皇兄の兄弟からなっていた。皇弟の周りには知識階級であり戦闘集団でもある僧会があった。

僧会はシュワから与えられた技術と教えを守り、粘菌やヒドラを生み出す科学者の集団と、呪術と武術を駆使して神聖皇帝の意のままに戦う僧兵の集団の合わさった組織であり、土鬼に古くから伝わる宗教を土着の邪教として排除する宗教統制の機能も担っている。シュワの宗教は権力機構と結びついた死んだ宗教のアナロジーとなっている⁶。

ナウシカはシュワの墓所の最深部に到達し、シュワの主と対峙する。ここで二つの信仰が対決する。1000年前をここでは「旧世界」と呼んでいる。彼らはナウシカたちにこう語りかける。

「永い浄化の時にそなた達はいる。だがやがて腐海の尽きる日が来るであろう。青き清浄の地がよみがえるのだ⁷。」

シュワの主たちは、汚染された地を浄化するために、土の汚染物質を無毒化する植物群からなる腐海を作り出した。腐海が吐き出す瘴気は、旧世界の人類には耐えられなかったが、これに耐えられるよう、人間の体を人工的に改造し、長い浄化の時を生き抜くことができるようにした。腐海が世界を飲みつくし、最終的にすべての大地を浄化した時が、主のいう「腐海の尽きる日」である。主はこう続ける。

「浄化のための大いなる苦しみを罪への償いとしてやがて再建へのかがやかしい朝が来よう。子等よ。私たちはこの墓を絶頂と混乱の時代に英知を集めて建設した。その朝が来た時世界の再建に

力になるようにと…。我が身体に現れる文字を読みその技を伝えるがよい。すべての文字が現れた解きその日が来る。苦しみが終わる日が…⁸。」

人間は罪を犯したが、長い苦しみの時を経てその罪があがなわれた時、救いの時が来る。これはキリスト教の教義に酷似しており、キリスト教のイメージが重ねられていることは明らかである。

造物主を見返す視線

この言葉に対してナウシカは強く反駁する。

「なぜ真実を語らない。汚染した大地と生物をすべてとりかえる計画なのだと！！さっきの影達が、腐海をつくり旧世界を緩慢に滅ぼそうと仕組んだ者達か⁹！？」

主と名乗る旧世界の記憶は、腐海とともに生きられるような次世代の人類、すなわちナウシカを含む物語の中の人類を生み出した存在である。限定的な意味ではあれ、主とナウシカは、造物主—被造物の関係にある。キリスト教を例に挙げれば、人間を造った神は、人間にとって絶対的な信仰の対象であり、神は人間の認識の能力をはるかに超えた高みに存在する。人間は神を信じるほか、対峙することも見返すこともできない。

しかしナウシカは神を見返す目を持っている。ナウシカは人類の中でただ一人、なぜ腐海があるのか、蟲や人間がその周りで生きるのかの答えに到達した。神が作ったプログラムの内部にいないはずの人間であるナウシカが自身の存在も含め世界を成り立たせるたくまれたプログラムの存在に気づき、その内実と作り手の意図までも見破ったのである。自己を内在させている身体、社会、自然界などをめぐる複数の層を一举に突き破り、欺瞞を見破ることのできる透徹した眼差し。これこそが神話としての『ナウシカ』最大の特徴であり、ナウシカが成し遂げる究極的な世界の転覆を象徴する。ナウシカは造物主である神を見返し、この神の作る世界を否定し、それとは異なる世界の原理を自らつかみ取る特殊な目を持った英雄なのである。

「真実を語れ」と神に迫るナウシカに対し、シュワの主はこう答える。

「どの真実をだね？あの時代どれほどの憎悪と絶望が世界を満たしていたかを想像したことがあるかな？数億の人間が生き残るためにはどんな

ことでもする世界だ。(中略)ありとあらゆる宗教。ありとあらゆる正義。(中略)調停のために神まで作ってしまった。とるべき道はいくつもなかったのだよ。時間がなかった。私たちはすべてを未来に託すことにした・・・¹⁰⁾」

実はシュワの主は語るべき真実をもたない。シュワは毒に耐えることのできる人類をつくりだし、浄化の時を待つ手段に過ぎないからである。しかしシュワは、人間に来るべき楽園を示して見せる点において宗教的な性格を失わない。

「これは旧世界のための墓標であり同時に新しい世界への希望なのだ。清浄な世界が回復した時汚染に適応した人間を元に戻す技術もここに記されてある。交代はゆるやかに行われるはずだ。永い浄化の時はすぎ去り人類はおだやかな種族として新たな世界の一部となるだろう。私たちの知性も技術も役目をおえて人間にもっとも大切なものは音楽と詩になろう¹¹⁾」

ここでシュワの主が描き出すユートピアは、ナウシカがシュワに至る直前に訪れた庭園に実現されている。それは浄化され、かつての世界に存在した動植物が暮らし、昔の音楽と文学がすべて保存されている世界である。ナウシカはそのユートピアを自ら去った。ナウシカが求めるものは神が差し出す楽園ではないのである。

ナウシカはシュワの主に対してこのように言う。「あわれなヒドラ。お前だっていきものなのに。浄化の神としてつくられたために生きるとは何か知ることなく最もみにくい者になってしまった¹²⁾」

ナウシカは自分たちを生み出した造物主に論駁するばかりか、その愚かさを憐れむ。そしてシュワの主をも含むすべての存在の始原へと眼差しを向けるのである。

グノーシス主義的な物語構造—グノーシス主義とはなにか

ナウシカが神を見返すことはどのような意味を持っているのだろうか。そこには何が起きているのだろうか。実は、神を不完全な存在として見返し、その先にあるものを見通す眼差しは神学において古代から存在するモチーフである。このモチーフを重要な特徴として持つのがグノーシス主義である。

グノーシス主義とは古代キリスト教の一派としてあらわれ、二世紀に最盛期を迎えるが、のちに教会によって異端とされた思想である。キリスト教以外の宗教とも影響関係を持ち、宗教の枠を超え広く展開した思想である。グノーシス主義に含まれる思想や宗教の内容は多様を極めるが、1966年に開催された「グノーシス主義の起源に関する国際学会」で、次の3点を満たしている思想を「グノーシス主義」と定義しようという提言がなされた。

「①反宇宙的二元論 ②人間の内部に「神的火花」「本来的自己」が存在するという確信 ③人間に自己の本質を認識させる救済揭示者の存在¹³⁾」

これを筒井は以下のように解説する。「この世界、この宇宙は劣悪な創造神が作ったもので、この創造神は善なる至高神と対立的な関係にある(①)。人間は創造神の作ったものであるが、その中に、至高神に由来する要素がわずかだけ閉じ込められている(②)。人間はそのことに気付かないでいるが、至高神から使いがやってきて、人間に自分の本質を認識せよと促す(③)¹⁴⁾」

グノーシス主義では人間や地上を造った創造神は不完全な神であり、その上に真の超越者である至高神がいるとする。至高神はあまりにも超越的であるために人間には認識することもできないが、この至高神が創造神を作ったため、至高神の要素がわずかに残っている人間はこれを通じて自己の内部から至高神につながるができるとする。

『ナウシカ』におけるグノーシス主義的な要素

ナウシカが創造神＝シュワの主を見返すことによって、神話的な位相に何が起こるのだろうか。それは第一に、旧来の神である創造神を退けることであり、第二に、そのことによって真の超越的存在を示すことである。

これに沿って物語を見ていこう。シュワの主は毒に耐えられる人類と腐海を生み出し、浄化へ向かう世界を作った創造神である。しかし創造神が劣悪な神であるために、作られた世界は苦しみに満ちている。ナウシカは旅を通じて創造神を超えた位相にある世界の原理に気づく。

グノーシス主義に即して言えばそれが至高神で

ある。しかし至高神とは人間をはるかに超えた存在であり、有限の人間の能力、例えば言語や知覚、認識能力で無限の神を捉えることは本来的にできない。したがってこうした超越的な神を言葉で表すことはできない。しかし、神学においては言葉によって神を論じるほかない。

キリスト教に限らず、超越神をめぐる神学につきもののこの問題は否定神学によって回収される。否定神学とは人間の認識や言葉によって神の「何であるか」は知られないが、「何でないか」は知られるとして、「・・・でない」という否定を重ねることによってより深く神を知ろうとする方法である¹⁵。

通常の論法では「神はAではない」とするならば、「神はAではないものである」という命題が成立する。しかし徹底した否定神学は、後者の命題すらも肯定的な側面を含むとして、「神はAではなく、Aでないものでもない」という叙述を行うのである¹⁶。ここに至ってもはや神は「無」としてあらわされるほかない。奇しくもナウシカがたどり着いた超越的な位相もまたナウシカによって「虚無」や「闇」と表現される。

ナウシカとシュワの間でたたかわされる闇と光をめぐる問答は、以下のとおりである。

「主：人類はわたしなしには亡びる。お前たちはその朝をこえることはできない。

ナ：それはこの星がきめること・・・

主：虚無だ！！それは虚無だ！！

ナ：王蟲のいたわりと友愛は虚無の深淵から生まれた

主：お前は危険な闇だ。生命は光だ！！

ナ：ちがう。いのちは闇の中のまたたく光だ！！すべては闇から生まれ闇に帰る。お前たちも闇に帰るがいい¹⁷！！」

ナウシカのいう闇が作中で登場するのは大海嘯でナウシカが仮死状態になった時である。ナウシカの心は身体から遊離して、世界の終わるところである虚無の深淵まで到達する。虚無を深く見つけたナウシカは、そこから帰還する。

ナウシカは、光と闇の二元論を足掛かりに自らの思想を築いていった。マニ族の僧正の登場以降、物語構造の中には光と闇の二元論が組み込まれ、物語を動かす大きな原理として働いた。例えば戦

争の間はナウシカ（ヒューマニズム）＝光、土鬼の神聖皇弟（破壊への欲望）＝闇という構図があり、大海嘯以後は闇＝ナウシカの見たこの世の果て、光＝腐海の尽きるところに生まれる清浄な世界という構図に変わるというように、光と闇の意味するものは変化しても二元論の構造は維持されていた。

しかしナウシカは最後に二元論を超えるものとして無を見出す。ナウシカが対峙した虚無は真っ暗な闇として描かれるが、死そのものではない。そこは生と死の区別のない始原なのである。虚無は完全な無であると同時に、無限に豊かな場でもある。つまりナウシカがたどり着いた超越的な場は否定神学とおなじロジックによって表現される超越的存在なのである。

第三章 現代の神話

現代の神話としての『ナウシカ』

以上から『ナウシカ』に備わる神話構造が明らかになった。しかし『ナウシカ』の物語は漫画作品の中で閉じられてはいない。それは神話である以上、我々読者の生きる現代の世界に開かれた物語でもあるのだ。

物語の中で、ナウシカは「青き衣の人」という伝説的英雄の再来と予言される。しかしナウシカはこのペルソナを引き受けるつもりはなく、自分の考えに根差した探求をあくまでも進める。つまり「青き衣の人」の伝説は物語を途中まで導くが、克服され、新たに書き換えられる運命にあるのである。

漫画『ナウシカ』の読者は物語を追いかけると同時に、いま、まさに新しい神話が生み出されようとする現場に居合わせて、世界の危機を克服するというダイナミズムの中で展開される思想対立や真理の探究を体験することになる。このとき漫画『ナウシカ』は物語の内部だけでなく、物語の外側、つまり読者が住む現代世界の神話となる。

ナウシカがグノーシス主義的な構造を持っていることは物語において非常に重要な意味を持つ。この世界を、その内部に生きる人間にとってはほとんど見ることができないほど高次の、外部的な視点からとらえ返し、その世界の欠陥を暴くこと。この眼差しは神話論的なレベルから世界の捉え方

を変えてしまう転換そのものである。この転換は動植物などの生き物のような具体的な位相から、神や生命の仕組みなどの超越的な位相までを含むダイナミックな転換であるために、多層的で構造的な変化は免れない。

『ナウシカ』が現代の神話であるとするなら、ナウシカの眼差しは物語内部の世界ばかりでなく、現代の世界にも大きな転換をもたらすことになる。

事実ナウシカ以降の宮崎駿監督による映画作品は、環境破壊や科学文明批判など現代的な問題と絡めて論じられることが多い。『ナウシカ』は核戦争がもたらすであろう環境の汚染、文明の破壊など、第二次世界大戦以後の世界が共有した恐怖や、破滅を知らながら争いをやめない人間の愚かさを前にしてそれをいかに克服するかをテーマにした寓話として一般に理解されている。製作者もこの点には自覚的で、スタジオジブリのプロデューサーである鈴木敏夫は『もののけ姫』を例にとりジブリの映画のテーマはフィロソフィーであると述べている¹⁸。ジブリの映画は現代を生きる我々にとっての哲学を物語にすることを一つの使命として引き受けているのである。

宮崎駿はおそらく、スタジオジブリにおける一連の映画作品を通じて思想的な探求を行った。その原点に位置するのは漫画の『ナウシカ』である。漫画『ナウシカ』の執筆と映像作品の製作が重なっている時期もあるので、厳密には時系列上の原点ではないかもしれないが、宮崎が複数の作品を通じて探求した思想を一つの大きな物語として捉えたとき、構造上の出発点に位置するのは紛れもなく漫画『ナウシカ』である。なぜなら『ナウシカ』はこれまでの世界に対する徹底的な批判と、それを超克して新たなステージへ進もうとする思想の運動そのものを物語構造によって示しているからである。

『ナウシカ』が否定するもの 1 戦争と帝国

では現代の神話としてみたとき『ナウシカ』が批判するもの、つまりシュワの主に当たるものとはいったい何だろうか。

第一に挙げられるのは戦争である。ナウシカの物語の前半を牽引するトルメキアと土鬼の戦争の場面では兵士や民間人の無残な死が執拗なほど描

写される。権力ゲームの捨て駒として無意味な死に追い込まれたり、空中分解した飛行機から落下する兵士たち。飢えや集団自決で死ぬ民間人。難民化した集団の苦難など、ありとあらゆる苦難と死が展開される。モデルとされているのは20世紀の二つの世界大戦である。特に宮崎の少年時代にあたる第二次世界大戦、わけても宮崎が史上最悪の戦争と考えていた独ソ戦は重要なモチーフとなっていると思われる。民間人を含めて数千万人に上る独ソ戦の犠牲はその悲惨さの先に、何のための死なのかというより根源的な問いかけを残す。『ナウシカ』で描かれる戦争の目的や理由はどこまでも空虚である。戦争を始めた権力者自身にも真の理由はわからない。犠牲は何のために払われたのかと問うても、その犠牲によってあがなわれるものは実は存在しない。『ナウシカ』において戦争がもたらしたのは、領土の汚染と国民の喪失という自滅のみである。

世界大戦は人類が自らを滅亡に導くばかりか、ほかの生き物も巻き込み、地球規模での破滅へと至る徹底的な破壊であるために人間の愚かさを描くためには有効な表象である。『ナウシカ』で問題化される「愚かな人類」は20世紀の世界大戦を起こした現代人を指している。利害や条理など通常の論理を超えたところで大量殺戮と破壊がどうして起きたのかを解明することは、戦後の知識人の大きな仕事として残された。

ナウシカの中で大戦の当事者となるのはトルメキアと土鬼である。いずれも広い国土と強力な軍隊をもつ帝国である。トルメキアは甲冑や衣類の形、宗教色の弱さ、権力機構や軍隊などからヨーロッパの国がイメージされている。それに対して土鬼は、独特の文字や衣服のほか、聖職者が実権を握り呪術的な技が用いられるなどオリエンタルな形象が多用されているように思われる。

しかしそれはあまり重要な違いではない。両者は強大な軍事力を背景に帝国支配を行うという点において共通している。この二つの帝国は宗教や文化の点で異なる点も多いが、科学技術と軍事力で周辺諸民族を従わせ、領土の拡大を自己目的とする点で、ともに19世紀から20世紀前半までのヨーロッパ列強やそれに準じる帝国を彷彿とさせる。ナウシカの物語世界における最大の文明

は、1000年前に滅びた巨大産業文明ということになっているが、土鬼はその遺産を直接的に引き継いでおり、トルメキアも巨大文明の廃墟の上に建設された国である点で文明国の継承者である。

大戦争を引き起こし、破滅への道をひた走る愚かな人類として描かれるのはこの二つの帝国である。権力者たちもさることながら、それにしたがって働く将校、兵士たち、僧たちもまた愚行を体現するものとして描かれる。とりわけ土鬼はシュワで得た技術をもとに、猛毒を出す粘菌や王蟲を培養し、生物兵器として使うことで、地球規模の破滅をもたらそうとする。こうした文明化された帝国が第二次世界大戦の当事者となった国々と重ねあわされている。

『ナウシカ』が否定するもの 2 近代文明とその思想

『ナウシカ』が否定する第二のものは、こうした文明が依拠する思想である。

シュワの主は、1000年前の産業文明の思想そのものである。それは、争いを好まない理想的な新しい人間を構想する。そしてこうした新しい人間を浄化した世界に住まわせるために、経過措置として毒に耐えられる体に改造した人間を生み出し、腐海が世界を浄化するのに立ち会わせる。ここには人間を分類し、一方（新しい人間）を生かすために他方（改造された人間）を犠牲にすることを是とする、フォーコーの鋭く批判した生・権力固有の思想がある。また生き物や地球の生態系を人間が知力によって支配できるという考え方もある。根本から新たな人間をつくろうとする発想はソヴィエトの革命思想にも見ることができるが、その革命思想の源流もまたキリスト教である。

最終的に批判されるのは、こうした帝国の権力構造と科学技術を発明し、世界に君臨した近代ヨーロッパ文明とそれを支えるキリスト教思想である。人間の理性の力に依拠し、自然を支配しようとした一神教的な文明である。第二次世界大戦においては日本のようにヨーロッパの外にある国も技術や制度、価値観を取り入れることでこれに参画した。世界大戦の終結後も、日本の国内の政治体制は変わったが、近代的な価値観が根本的に変わったわけではない。漫画『ナウシカ』を通じてなされたのは当時の日本がよって立つ思想的基

盤を可能な限り深くから、すなわち文明が依拠する宗教的な論理構造のレベルから見返し、否定することによって、それに代わる戦後の哲学の道を開くことであった。

新たな思想とは

それでは、これに代わる新たな思想とは、どのようなものだったのだろうか。実は、それは『ナウシカ』の結末では明白に示されていない。確かにナウシカの信念や生命観は示されているが、それは光と闇の二元論やグノーシス主義を足掛かりとしてたどり着いたものであるために、キリスト教的世界観の論理構造からは大きく出ている。

『ナウシカ』の作中では多くの問題が提示された。近代の思想に支えられて生じた20世紀の破滅的状况をどう理解するのか。近代の高度な文明を支えた神に対する否定をいかにして達成し、現代にふさわしい新たな思想を、どう構築していくのか。人間の愚かさと人間を含む生命の尊さの二律背反をどう弁明するのか。これらの問題は物語の中で形を与えられ、提示されるだけでも一定の意味があったといえるが、漫画『ナウシカ』においてこれらの問いに対する答えが明確に示されたとは言えない。それらは萌芽の状態にあり、思想の輪郭がまだ明確になってはいないのである。しかし、萌芽ではあってもその後の宮崎作品で展開される思想の多くがすでに出そろっているようにも見える。それらは結末で示されるナウシカの抽象的な主張よりも、むしろ漫画作品を通じてディテールの中により具体的な形で描かれている。

粘菌の生命論

それをいくつか取り出してみよう。まず注目したいのは粘菌である。『ナウシカ』では物語世界の固有の生態系が存在する。腐海の植物や蟲は、ムシゴヤシやヒソクサリなど、架空ではあるが個々に名前や特性が設定され、固有のシステムをもつ世界として綿密に構想されている。腐海は人間の世界に隣り合って存在するが、別世界としての独立性と、人間の世界とは異なる英知に満たされた自然を象徴している。

粘菌は腐海を構成する生き物の一つとして登場する。ナウシカの世界の腐海は、総じて進化の系統において早くから存在する植物からなる生態系である。粘菌自体は実在する生き物だが、ほかの

生き物にない特徴を持っている。粘菌は孢子で増え、有機体の分解を行うという通常の菌類と同じ生態を持つ一方で、ライフサイクルの一時期に動物のように動き捕食者としてもふるまうのである。植物の一部と考えられていた菌類と動物の二つの様態を併せ持つ、進化の系統において他に例のない特異な生き物として、微生物や菌類が研究対象として浮上してきた19世紀の生物学において注目を集めた。折しも当時、生物学は18世紀まで主流であった、形態をもとに生物の世界の秩序を見出す分類の学から、身体の内部で進行し死へと向かうプロセスを探求する生命の学へと大きく転換しようとしていた。この中で粘菌は単に珍しいばかりでなく、植物的な秩序の空間に動物的な生命の力動を持ち込むという特徴を通じてこの転換の本質を示してみせた¹⁹。この粘菌のありように依拠して考えるならば、粘菌は生命をめぐるパラダイムの転換を表象しているといえる。

粘菌の研究を通じて新たな生命論を導き出した学者として南方熊楠が知られている。宮崎は養老孟司との対談の中で、「南方熊楠は粘菌なんて面倒くさいところに入り込んだから、それである人は発狂しなくて済んだって聞きました。」と述べている²⁰。これと同じ表現を南方熊楠は柳田國男宛ての書簡の中で行っている。

「小生は元来はなはだしき疝積もちにて、狂人になることを人々思えたり。自分このことに気がつき（中略）宜しく遊戯同様の面白き学問より始むべしと思ひ、博物標本をみずから集むることにかかれり。（中略）この方法にて疝積をおさうるになれて今日まで狂人にならざりし²¹。」

こうした表現や、粘菌という特異な生き物に物語のカギとなる重要な役割を与えていることから宮崎駿が南方熊楠の著作から『ナウシカ』における粘菌のモチーフをとり入れた可能性はある。

19世紀に新たに見出された生命の概念を、外側から観察する科学の方法において突き詰めると、生物の中に一つの有機的なシステムが見出されることになる。そこでは自らの内部と外部の間で情報や栄養のインプットとアウトプットを繰り返す、主体としての生命がイメージされる²²。しかし南方熊楠はこれとは違った形で生命を捉えようとした。中沢によれば、熊楠は仏教思想を土台

として独自の生命論の理論化を目指した。そこでは西欧的な主体の概念の条件となる生命にとっての内部と外部が想定されない。自己の境界は絶えず自律的に作られるが、そこから客観的・空間的な内と外の二分法は存在せず、生命にとっての外部は生命が自己創出するものであり、内部で行われる生命の力動から生み出される、その生命にとっての現実—すなわち一種の幻想であるとする²³。

南方熊楠は自律体でありながらそれぞれの幻想を生きる生命を多次的に構想することができる論理モデルとして密教のマンドラを選んだ。南方熊楠は真言宗の僧侶、土宜法竜宛ての書簡の中で「森羅万象すなわち曼陀羅なり²⁴。」という言葉を残している。有限の物質の世界のみを対象とする欧米の科学を批判しつつ、「科学を真言の一部として（せずとも実際然り）、宇宙一切を順序立て、（中略）宇宙の一部を楽しむことをせしめて見よ²⁵」と述べ、仏教の枠組みから宇宙を据え直すことの利点を主張する。中沢が粘菌論から導いた南方熊楠の生命観は、生と死が生命そのものではなく、生と死を状態の表れとしてあわせ持つ高次の会域が存在する。それがマンドラであり、ここでは生命は生死の二元論を超え、巨大な全体的連関の中にあるというものである²⁶。南方熊楠は森の奥深くに分け入って研究を続ける中でこうした生命観に到達した。南方熊楠にあっては、森は客観的実在というよりも、多数の生き物が出会い、繋がり合って複雑を極めた生態系を形作る場であり、生きた集合体である。この森の一部となり、森とひとつつながりの生命を生きる境地に至ることが南方熊楠の生命論の最終形態である。

粘菌は南方熊楠の展開した生命論の仏教的な論理構造を象徴する生き物である。『ナウシカ』において、食べることで食べられることが同じであり、生と死が対立することなく溶け合うことが森としての腐海を形づくる原理であることを示すのは粘菌である。ナウシカは食べることが単なる殺戮や利己的行為ではなく、生命を、それが宿る身体を超えてより大きな流れの中に導き入れることであるという認識に達する。仏教思想を取り込むことによって森を一つの生命体として、さらには生命の秘密を開く高次のトポスとして発見するこ

とは『ナウシカ』以降の宮崎監督の映画を通じて展開していく主題となる。

一神教から汎神論へ

以上のことから神を見返すナウシカの眼差しが引き起こしたパラダイム転換がいかなるものであったのかが明確になってきた。

シュワの主は、知性によって生き物を生み出し、地球の生態系を数千年の規模でコントロールし、その果てにユートピアを到来させようとする。キリスト教の教義にある創造神をそっくりまねたシュワの主は一神教の神になぞらえられる。一神教の神は人間にとって非知であるはずの超越性に根拠を置き、人間にその超越性に近づく特権を与え、全体性を維持するよりも人間を世界から分離し、人間を中心として世界を作り替えていくよう導く神である。

しかしナウシカの眼差しによって一神教は相対化され、人間と自然が交流し、生死が溶け合うところに展開する汎神論的な世界への転換が成される。それは、南方熊楠が探求したスピリット（霊性）の充溢する流動的な構造をもつ。そこでは精神は世界の超越性に触れることはあっても我が物として内部に取り込むことはしない。

グノーシス主義的な構造を持つ『ナウシカ』が最終的に汎神論へと至ることに神話論上の矛盾はないのだろうか。グノーシス主義における至高神は一見すると、創造神以上に純化された唯一神であるように思われる。しかしグノーシス主義においてはむしろ至高神は多産であり、その霊性をあまねく世界へと拡大する多神教的な神話世界を構築する。

あまねく世界に霊が宿るという考え方は、人間には超越的な存在とつながる要素が内在しており、自己の内部で神に出会うことができるという神秘思想へとつながっていくが、こうした考え方はグノーシス主義やキリスト教の枠を超えて、広く世界の宗教にみられるものでもある。例えばシャーマニズムでは、特殊な訓練によってその要素を働かせることができるようになったシャーマンが自らの内部において神とつながると考えられている。キリスト教においても、聖霊を重視する東方正教のヘシカズムのように、同様の神秘思想は正統の内部に存在している。ナウシカがその

眼差しの先にみるのは、一つの民族や文明の宗教ではなく、それらを超えたところにある汎世界的な思想である。

シリーズとしてのジブリ映画

人間中心の近代合理主義から、汎神論的世界観へ。こうした思想の転換と探求は20世紀の後半における学術や芸術の領域でも広く見られた。人類学を通じて「発見」されていった非ヨーロッパ圏の高度に発展した文化と思想は近代合理主義を相対化し、それに代わる原理になろうとしていた。しかしそれが大衆文化において子供にも大人にも直観的に受け止められる現代の神話として、しかもその世界観の交替と足並みをそろえて作られたという点で宮崎駿の作品は文化史上、重要な意味を持っている。

『ナウシカ』で粘菌を入り口として示された新たな世界観を物語化し、探求する作業は、その後スタジオジブリで宮崎駿が制作した映画に持ち越された。探求の場となった作品として挙げられるのは『天空の城ラピュタ』、『となりのトトロ』、『もののけ姫』、『千と千尋の神隠し』である。

『天空の城ラピュタ』では天空の超越者（偽の神）を見限り、それ以上の神を追求せず地上への回帰という形で未来を提示する。『となりのトトロ』では偽の神はもはや登場せず、人間とは違う世界に住む存在として森の精（＝トトロ）が示される。『もののけ姫』や『千と千尋の神隠し』では精霊のような存在としての八百万の神が登場する。これらの作品にはナウシカで否定した愚かな神に代わる神や世界像が徐々に豊かで明確な姿を取る様が見出せる。ナウシカと同様、それらの作品は森や火、風などの象徴に満たされた神話的思考によって紡がれる現代の神話を語り、観客もまたこれを思想の書として受け止めたのである。

了

¹ 宮崎(1983)『風の谷のナウシカ 1』、裏表紙。拙論ではこのほか以下の一次資料を参照した。宮崎(1983)『風の谷のナウシカ 2』、宮崎(1985)、宮崎(1987)、宮崎(1991)、宮崎(1993)、宮崎(1995)。

² ホメロス(2014)、157-167頁。

³ エヴスリン(2005)、162-164頁。

⁴ 宮崎(1983)『風の谷のナウシカ 2』127-134頁。

⁵ 大貫(2014)、265-267頁。

- ⁶ 宮崎 (1985)、94 頁。
⁷ 宮崎 (1995)、195 頁。
⁸ 同書、196 頁。
⁹ 同書、197 頁。
¹⁰ 同書、199 頁。
¹¹ 同書、199-200 頁。
¹² 同書 200 頁。
¹³ 筒井 (2004)、184 頁。
¹⁴ 同書、184 頁。
¹⁵ 廣松 (1998)、1320 頁。
¹⁶ 筒井 (2004)、93 頁。
¹⁷ 宮崎 (1995)、201-202 頁。
¹⁸ 鈴木 (2016)、106-109 頁。
¹⁹ 中沢 (2012)、266 頁。
²⁰ スタジオジブリ (2014)、54 頁。
²¹ 南方 (1991)『南方熊楠全集 第八巻』、211 頁。カッコ内は論文著者による。
²² 中沢 (2012)、290 頁。
²³ 同書、301 - 304 頁。
²⁴ 南方 (1991)『南方熊楠全集 第七巻』、465 頁。
²⁵ 同書、376 頁。
²⁶ 中沢 (2012)、295 頁。

参考文献

- バーナード・エヴスリン著、小林稔訳 (2005)『ギリシア神話物語辞典』原書房。
 大貫隆訳著 (2014)『グノーシスの神話』講談社学術文庫。
 鈴木敏夫 (2016)『ジブリの仲間たち』新潮新書。
 スタジオジブリ編 (2014)『熱風 スタジオジブリの好奇心』第 12 巻 2 号。
 筒井賢治 (2004)『グノーシス 古代キリスト教の<異端思想>』講談社選書メチエ。
 中沢新一 (2012)『森のバロック』講談社学術文庫。
 廣松渉ほか編 (1998)『哲学・思想事典』岩波書店。
 ホメロス (松平千秋訳) (2014)『オデュッセイア (上)』岩波文庫。
 南方熊楠 (1991)『南方熊楠全集 第七巻 書簡 I』平凡社。
 南方熊楠 (1991)『南方熊楠全集 第八巻 書簡 II』平凡社。
 宮崎駿 (1983)『風の谷のナウシカ 1』徳間書店。
 宮崎駿 (1983)『風の谷のナウシカ 2』徳間書店。
 宮崎駿 (1985)『風の谷のナウシカ 3』徳間書店。
 宮崎駿 (1987)『風の谷のナウシカ 4』徳間書店。
 宮崎駿 (1991)『風の谷のナウシカ 5』徳間書店。
 宮崎駿 (1993)『風の谷のナウシカ 6』徳間書店。
 宮崎駿 (1995)『風の谷のナウシカ 7』徳間書店。

Mythology of “Nausicaä of the Valley of the Wind”

Ono Tokiko

Abstract

This paper analyzes the comic “Nausicaä of the Valley of the Wind” based on the theory of mythology, and deciphers the work’s hidden message as modern myth.

First, we compare religious and cultural doctrines between the Mani and Shuwa in Nausicaä. Their confrontation is one of important motives driving the plot. Through the confrontation and odyssey, Nausicaä was the only character that could find the hidden gods of creation.

Second, we discuss the characteristic quality of Nausicaä as a mythological heroine. A new faith of the earth and the life presented by Nausicaä is established by the denial of gods’ rightfulness and universality. We analyze the similarity of the logical structure between Nausicaä’s faith and Gnosticism, and find her to be a character to criticize an imperfect type of monotheism and the world.

Finally, we consider how the work presents new symbolism and religious thought in contemporary Japan. After analyzing criticism against war and modern civilization in this work, we find the symbolism of the characteristic thought of life in the representation of slime molds. The work presents a paradigm shift to pantheism, and this theme was developed in Miyazaki Hayao’s subsequent films.

(2019年11月1日受理)